

はじめに

本学附属図書館の所蔵する絵双六コレクションを紹介する「絵双六シリーズ」の3回目として、今回は「道中双六」といわれるものを中心に展示しました。

「道中双六」は、旅の道程を絵双六にしたものですが、その主流を占めたのが東海道の道中双六です。最初のコーナーに、まずそれらの数々を集めてみました。東海道の道中双六には、京都から江戸へ下るものもありますが、今回展示したものは、江戸日本橋を振り出しとし、五十三次の各宿場をたどり、京都を上りとするものです。これらの双六は、歌川広重をはじめ、当代一流の浮世絵師によって描かれ、美術品としても鑑賞することができます。そのコマ絵には、旅の風俗やその土地の風景などが描かれますが、中には名所や名物を描いたものも見られ、観光やグルメなどの情報を得るものともなっています。また、狂歌を書き入れたり、『東海道中膝栗毛』でおなじみの弥次さん喜多さんを登場させたりと、それぞれ様々な趣向が凝らされています。明治になると、文明開化の文物を描いたものも現れました。「道中双六」を通して、昔の人々の旅の様子や風俗、往時の街道の姿などを知るとともに、そうした趣向の面白さ、いわば「遊び心」にも目を向けると、絵双六を見る楽しさも倍加することでしょう。

なお、「道中双六」と併せ、江戸の名所・名物案内の双六や世界を廻る双六も展示しました。当時の文化の豊かさに思いを馳せ、「道中双六」ともども楽しんでいただければ幸いです。

東京学芸大学 日本語・日本文学研究講座 教授

嶋 中 道 則

